

—— Let's embark on a journey to discover our own “perspective on the Lotus Sutra”！

（“法華経観”を見つける旅に出よう！）

『妙法蓮華経 普賢菩薩勸発品第二十八』 ふげんぼさつかんぽつぽん ほんもん るつうぶん（本門・流通分）

○『又如来の滅度の後に、若し人あって妙法華経の乃至一偈・一句を聞いて一念も随喜せん者』

には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』（法師品 二〇二頁 終五行）

○『其の習學せざる者は 此れを曉了すること能わじ』（方便品 八十二頁 四行）

○「習学」の3つのステップ「聞解・思惟・修習」

○『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得』

たりと知れ』（法師品 二〇九頁 三行）

○『十分の一でも実践できれば、また一つでも徹することができれば、立派な精進』



<普賢菩薩勸発品のあらすじ>

【普賢菩薩が東方の世界(過去の世界)からやって来る】——

【三八二頁 一行】釈尊が『妙莊嚴王本事品』を説き終えられると、人々を自由自在に救う大徳を具える普賢(ふげん)菩薩が、無量無辺という数えきれない大菩薩たちと共に、東方の世界(過去の世界)から娑婆世界にやって来ました。

この大菩薩の一行が東方の世界から娑婆世界へ向かう途中、通過する国々では国中が感動で打ち震え、宝石のような蓮華の華が雨のように降り注がれました。そして無量百千万億という無数の妙なる楽曲を奏(かな)でて、一行を讃嘆・供養したのでした。

【三八二頁 三行】無数の天人・竜神・夜叉(やしや)・乾闥婆(けんたつば)・阿修羅(あしゅら)などの鬼神たちや人間、人間以外の生き物たちは普賢菩薩と大菩薩の一行を囲んで、かしずき礼拝しました。そして普賢菩薩は様々な神力を現わしながら娑婆世界の靈鷲山にやって来たのでした。到着すると普賢菩薩は釈迦牟尼仏のみ足に額(ひたい)を付けて礼拝し、釈尊の周囲を右回りに七回周(まわり)、仏徳を讃嘆する最高の礼を尽くして世尊に申し上げました。

【仏滅後、どのようにすれば『法華經』を体得(たいとく)できるか？ 普賢菩薩が問う】——

【三二頁 終五行】「世尊よ。私は宝威徳上王仏(ほういとうきょうおうぶつ)の国におりましたが、はるか遠い娑婆世界で、世尊が法華經をお説きになられていることを伺い、無量無辺百千万億という無数の菩薩たちと共に法華經を拝聴するためにやってまいりました。どうか私どものためにも法華經をお説き願います。／『若(も)し善男子・善女人、如來の滅後に於て云何(いかに)してか能(よ)く是(こ)の法華經を得ん』もし、仏さまがご入滅なされましたら法華經を得ることはできなくなります。その時、善男子・善女人は、どのようにすると法華經を体得(たいとく)することができるのでしょうか。教えてください」

【『四法成就』こそ、『法華經』を体得(たいとく)し、成就(じょうじゆ)する方法】——

【三二頁 終行】/【經典三〇頁 終二行】すると釈迦牟尼仏は普賢菩薩にお答えになりました。

『佛、普賢菩薩に告げたまわく、～ 四法を成就せば如來の滅後に於て當(まさ)に是(こ)の法華經を得(う)べし』「もし善男子・善女人が、次の四つのことがらをしっかりと行えば、如來の滅後においても法華經を掴(つか)んだことになり、法華經の眞の功徳を得ることが出来ましょう」

その四つとは、／『一には諸佛に護念せらるることを爲(え)』**第一**に、『諸仏に護念(ごねん)されているという絶対の信念を持つこと』。／『二には諸(もろもろ)の徳本(とくほん)を植え』**第二**に、『いつも様々な善い行いをするように心がけること』。／『三には正定聚(しょうじょうじゆ)に入(い)り』**第三**に、『いつも正しい信仰者の仲間に入っていること』。／『四には一切衆生を救うの心を發(おこ)せるなり』そして**第四**に、『一切衆生を救おうという心を起こすこと。すなわち、いつも社会全体を良くすることを目指すこと』。／『四法を成就せば、如來の滅後に於て必ず是(こ)の經を得ん』これらの四つのことを善男子・善女人が満足に行なえば、私がこの世を去った後においても、法華經を必ず自分のものにすることができます」

——【四法成就・しほうじょうじゆ】

【末法の時代の法華經実践者を守護することを、普賢菩薩が誓う】——

【三八三頁 四行】/【經典三一頁 終三行】その時、普賢菩薩は仏さまに申し上げました。

『爾(そ)の時に普賢菩薩、佛に白(もう)して言(もう)さく、世尊、後の五百歳濁惡世の中に於て』「世尊よ。私はお誓い致します。もし末法の時代である『後の五百歳・闍諍堅固時(とくしょうけんごのとき)』という濁惡世(じよくあくせ)において法華經を受持する者がいたならば、／『我當(まさ)に守護して其の衰患(すいげん)を除き、安穩なることを得せしめ、伺(うかが)い求むるに其の便(たより)を得る者なからしむべし』」私はその者をしっかりと守護致します。その者に降りかかる様々な禍(わざわい)を取り除き、いつも安穩に教えを實踐できるように守ります。もし何者かが法華經実践者の修行・精進を妨(さまた)げたり、隙(すき)を狙(ねら)って憑(とり)魅(つ)き、迫害を加えようとする者がいたならば、そのことが着手できず、その手がかりすら掴(つか)めぬように致しましょう」

【三八三頁 七行】「魔や魔の子、女性の魔、魔の手下(てした)ども、そして魔に憑(とり)魅(つ)かれた者たち、さらには夜叉(やしや)や羅刹(らせつ)など人々を悩ます惡鬼(あくき)どもが惡事をしようとしても、その手がかりすら掴(つか)めぬように致します」

【三八三頁 終行】『若(も)しは行(ゆ)き若しは立つて此の經を誦誦せば、我爾(われそ)の時に六牙(ろくげ)の白象王(びやくぞうおう)に乗って、大菩薩衆と俱(とも)に～自(みづか)ら身を現じて供養し守護して』

「その人が立っている時、または歩いている時に法華經を誦誦するならば、私は六牙(ろくげ)の白象に乗って大菩薩たちと共にその場所に現われ、その人を供養し、守護して、その人の修行・精進が滞(とどこ)りなく安らかに行なえるように致しましょう。なぜそうするのかと言えば、ひとえに法華經の教えに感謝するためであります」

【三八四頁 二行】『若(も)し法華經に於て一句・一偈をも忘失(もうしつ)する所有(ところあ)らば、我當(われま)に之(これ)を教えて與共(とも)に讀誦し、還(かえ)って通利(つうり)せしむべし』「ある人が静かに坐(ざ)して、この法華經について思惟(しゆい)し、考えを深めるならば、私は白象に乗ってその人の前に現われましょう。もしその人が法華經の一句または一偈(いちげ)を忘れてしまうようなことがあれば、私はそれを教えてあげ、一緒に讀誦し、法華經の真意が的確に理解できるように計(はか)らいましょう」

【三八四頁 三行】「法華經を受持し讀誦する人は、／『我が身を見ることを得て、甚(はなは)だ大(おお)いに歡喜(かんぎ)して転(うた)た復(また)精進せん。我を見るを以ての故に即(すなわ)ち三昧及び陀羅尼(だらに)を得ん』私をただ心に思い浮かべるだけで、大いに歓びを感じ、一層の精進を励むことができますようにあります。私をただ思い浮かべるだけで、常に心の乱れがなくなり、善をすすめて悪をとどめる力を得ることが出来るようになります。そればかりかその善をおしすすめる影響は百千万億という人々に影響を及ぼします。そして真理の教えを自由自在な方便をもって説く力を、身に付けることが出来るであります」

【三八四頁 七行】「世尊よ。もし濁惡世(じよくあくせ)の末法の時代で、男女の出家・在家の修行者が法華經を心から求め、教えを受持・讀誦・書写し、法華經の實踐に努めようと望むならば、／『三七日(さんしちにち)を滿じ已(おわ)らんに、我當(われま)に六牙(ろくげ)の白象に乗って、～身を以て其の人の前に現じて、爲(ため)に法を説いて示教利喜(じきょうき)すべし』三七日(三週間)、一心に精進しなければなりません。そして三七日(三週間)の精進が滿行(まんぎょう)した時、私は六牙(ろくげ)の白象に乗って、大菩薩たちと共に一切衆生が歡喜して見るような姿となってその場所に現われましょう。そして、法華經を説き、その人を順序次第に従って導いていきます」

【法華經實踐者を守護する総持真言『陀羅尼』を、普賢菩薩が唱える】——

【三八四頁 終行】「私はそれらの人々に総持真言(そうじしんごん)を与えましょう。この総持真言は、人間以外の魔物から脅(おそ)かされるものではありません。また、異性から誘惑(ゆうわく)されても惑(まど)わされることなどありません。私はその人々を常に守護いたします。世尊よ。願わくは、この総持真言を説くことをお許しください」

【三八五頁 三行】そう申し上げた普賢菩薩は、釈尊の御前(おんまえ)で神呪(しんじゆ)を唱えました。

【經典 裏十二頁 一行】「阿檀地(あたんだい/無我よ) – 壇陀婆地(たんだはだい/小我を除くことよ) – 壇陀婆帝(たんだはて/我方を破することよ) – ～ 薩婆薩埵(さるばさた)・樓駄憍舍略(るだきょうしゃりや)・阿耨伽地(あとぎやだ/一切衆生の声を悟ることよ) + 辛阿毗吉利地帝(しんあびきりだいて/獅子が自由自在に遊戯することよ) = +」

【総持真言『陀羅尼』を受ける功德】——

【三八五頁 終四行】「世尊よ。もし菩薩行を実践している人がこの神呪(しんじゅ)を耳にすることができたならば、普賢菩薩の神通力によって守護されていることを知らなければなりません。／『若(も)し法華經の閻浮提(えんぶだい)に行ぜんを受持することあらん者は、此の念を作(な)すべし。皆是(みなこ)れ普賢威神(いじん)の力なりと』法華經を世界中に広め、法華經を受持する者は、自分に普賢菩薩の偉大なる神力を得ていることを自覚しなければなりません。この法華經を受持・読誦し、教えの内容を深く理解して、しかもそれを正しく記憶して修行精進する者は、ほかでもありません。／『當(まさ)に知るべし、是(こ)の人は普賢の行を行ずるなり』**①普賢菩薩と同じ行いを行じている人**なのです。しかもその人は／『無量無邊(むへん)の諸佛の所(みもと)に於て、深く善根を種(う)えたるなり』**②前世から無量無邊という無数の仏に仕えて精進し、諸々の善根を積んだ人**なのです。／『諸(もろもろ)の如來の手(みで)をもって、其の頭(こうべ)を摩(な)でたもうを爲(え)ん』**③『如來の子である』**として仏から頭を撫(な)でられている人であります」

【三八六頁 二行】「もし法華經をただ書写しただけでも、その人は寿命が尽きた後、**忉利天(とつてん)**という天上界に生まれ変わることができましょう。そこでは八万四千人という多くの天女たちが美しい音楽を奏(かな)でて迎え入れ、七宝(しっぽう)の冠(かんむり)を着けた官女(かんによ)たちが美しい人となって安樂な暮らしを送ることができるであります。ましてやこの教えを受持・読誦して教えの内容を深く理解し、それを正しく記憶して修行・精進する人が亡くなろうとする時、千の仏が手を差し伸べてくれ、死を恐れることもなくなります。しかも**四惡趣(しあくしゅ)**という**地獄・餓鬼・畜生・修羅**の惡道の世界に落ちることもありません。そして**兜率天(とそつてん)**という天界において、この世で釈迦牟尼仏の次に仏に成る**弥勒(みろく)菩薩**のそば近くに生まれ変わるようになるでしょう(弥勒菩薩のように慈悲を具えて、菩薩行に励む身となることであります)。この弥勒菩薩は、仏さまと同じ三十二の貴相(きそう)を具え、多くの大菩薩方に囲まれて百千万億の天女や家来たちに仕(つか)えられている大菩薩です。そういう大菩薩のもとに生まれ変わるということですから、まことに甚大(じんだい)な大功德であると申せます」

【三八六頁 終三行】「そういうわけですから、本当に**智慧ある者は**、この法華經を自ら一心に書きとめ、人にも書くことを薦(すす)めなければなりません。そして教えを受持・読誦して内容を深く理解し、正しく記憶して教えの如く修行しなければなりません」

【三八六頁 終行】「世尊よ。神通力をもって、この教えを護(まも)ります。教えを広め、実践する人を、私は神通力をもって守護します。そして、如来がお亡くなりになられた後においても、この教えを世界中に広めて絶えることがないように致します」

【法華經実践者を守護することを、釈尊も誓う】——

【三八七頁 二行】**釈迦牟尼仏**はその言葉をお聞きになると満足そうに頷(うなず)かれ、**普賢菩薩**を讃(たた)えました。そして次のように仰(おお)せになりました。

「善(よ)いかな。善(よ)いかな。普賢よ。そなたはこの法華經を護(まも)り、世に広まることを助け、衆生が多く利益(りやく)を得て幸福になれるように計(はか)らいました。素晴らしいことです。そなたはすでに数えきれない甚大(じんだい)な功德を成就し、大きな慈悲を具(そな)えている大菩

薩です。しかもはるか永遠の昔から仏の悟りを得ようという志を立てており、精進を重ね、そしてこの法華經を守護しています。／『我當(われまき)に神通力を以て、能(よ)く普賢菩薩の名を受持せん者を守護すべし』普賢菩薩と同じ心で修行する者を、私も神通力を以って守護しましょう」

【法華經を實踐する者は、釈尊から直接に法を得る者】——

【三八七頁 六行】「普賢菩薩よ。もしこの法華經を受持・読誦し、教えの内容を深く理解して、それを正しく記憶し、さらには繰(く)り返し修行精進して教えを書き写し、人に広める者は、／『是(こ)の人は則(すなわ)ち釋迦牟尼佛を見るなり、佛口(ぶつぐち)より此の經典を聞くが如し』」まさにその人は釈迦牟尼仏を見る人であります。そればかりか釈迦牟尼仏の口から直接、説法を聞く人と同様であると言えます」

【三八七頁 終五行】「まさに知らなければなりません。法華經を受持・読誦し、實踐する人は、釈迦牟尼仏を供養する人に外(ほか)なりません。仏から『善哉(ぜんざい)。善哉』と褒(ほ)められる人です。さらに釈迦牟尼仏から直接頭を撫(な)でられ、心から信頼を寄せられる人です。またいつも／『釋迦牟尼佛の衣(ころも)に覆(おお)わることを爲(え)ん』釈迦牟尼仏の衣(ころも)に覆(おお)われ、仏からしっかりと抱(いだ)かれて仏と一体となっている人です。このような人は快樂(がいらく)を貪(むさぼ)り、それにとらわれ、仏教以外の教えに固執することなどありません。娯樂の文書に没頭してそこから抜け出せなくなることもありません。また、自分から進んで獸(けもの)を売って生計を立てる者や獮師、そして女色(じょしょく)を生業(なりわい)とする者に近づくことなどありません。

【三八八頁 二行】「この人は／『心意質直(しんにしちじき)にして』誠実で正直、素直であり、／『正憶念(しょうおくねん)あり』真理に合致した考え方ができているために、／『福德力(ふくとくりき)あらん』多くの人を幸せにする力を具えています。そしてこの人は、『貪・瞋・痴(とんじんち)』の三毒に悩まされることもありません。また嫉妬(しど)・我慢(まん)・邪慢(じゃまん/無反省の心)・増上慢(ぜうじょうまん/悟ってもいないのに悟っていると思ひ込むこと)に心を毒することもありません。この人は／『少欲知足にして能(よ)く普賢の行を修せん』『少欲知足』で、普賢菩薩のように法華經を徹底的に實踐するであります」

【三八八頁 四行】「普賢よ。末法世で法華經を受持・読誦する者を見たならば、次のように思ってよいでしょう。それは『この人は長い時を経(へ)ずして、諸々の魔の大軍を打ち破って仏の悟りを得る人である。そして太鼓やほら貝が響きわたるように法華經を説き広め、大雲から降り注ぐ慈雨のようにこの世を潤(うるお)すであります。しかもこの人は、天上界・人間界の全ての者たちの中で最高の座に就(つ)くことになり、多くの尊敬を受ける人』だと思ってよいでしょう」

【三八八頁 終五行】「普賢よ。仏の滅後において法華經を受持・読誦する者は、衣食住にとらわれて貪欲・執着の日を送ることはありません。／『所願(しょうがん)虚(むな)しからじ。亦(また)現世に於て其の福報(ふくほう)を得ん』その人の願うことは、『事物による願望成就』ではなく『心の解脱』であり、その願いは必ず叶(かな)えられるであります」

【法華經を實踐する者を謗(そ)いる罪】——

【三八八頁 終三行】「もしある者が、法華經を信じて行じている人に対して『おまえは正気を失った

のか。そんなことをして何になる。馬鹿な奴だ』と謗(そ)り、輕蔑(けいべつ)するならば、その批判する者は、何度生まれ変わっても盲目の身(正しく物事を見ることが出来ない人)となって生まれることになるでしょう。反対に、／『當(まさ)に今世に於て現(げん)の果報を得(じ)べし』法華經を信じ行ずる人を供養し、讚歎(さんたん)する人は、今世において現実の果報を具体的に得ることでありましょう」また、この法華經を受持する人を見て、その人の上(あ)げ足をとったり、粗(あら)探しをしたり、それを世間に吹聴(ふいちよう)するようなことをするならば、その**事実の有無を問わず、法華經行者を謗(そ)る者は**、今世において白癩(びやくらい)という病気の身(心の穢り、不満の人生を送ること)となるであります」

【三ノ八頁 終三行】「もし法華經を信ずる人をあざけ笑うようなことがあったならば、そのあざけ笑う者は、生まれ変わり死に変わりしても、醜(みにく)い姿となって生まれ続けるであります。その醜(みにく)い姿とは、齒の間が空(す)き、唇の形が醜(みにく)く、鼻が平たくで、手足が曲がり、目つきが醜(みにく)く、体から異臭を放ち、悪性の出来物が体じゅうにあり、膿(う)みただれ、腹水がたまってお腹が大きく、結核などの重い病気を持つ身となるであります。そのようなわけですから、普賢よ。この法華經を受持する者に対して、／『當(まさ)に起(た)って遠く迎(むか)うべきこと、當(まさ)に佛を敬(や)うが如くすべし』たとえ遠くにその姿を目にしたとしても、仏と同じように敬わなければならないのです」

【『普賢菩薩勸発品』を聞いた無数の菩薩たちが感動、大歡喜】——

【三ノ八頁 七行】すると、この『普賢菩薩勸発品』を同った恒河沙(ごうがしゃ)というガンジス河の砂の数ほどの**無数の菩薩たち**は、百千万億人に及ぶ陀羅尼(だらに)／善をすすめ悪をとどめる大きな教化(けうか)を得ることができました。／『三千大千世界微塵(みじん)等の諸(もろもろ)の菩薩普賢の道(どう)を具(ぐ)しぬ』そして三千大千世界を微塵(みじん)にした数である無数の菩薩たちも、普賢菩薩と同じ法の実践力を身に具えることができたのであります」

【三ノ八頁 終三行】こうして**釈迦牟尼仏**がこの法華經の教えの全てを説き終えられると、普賢菩薩をはじめとする諸々の菩薩たちや、舍利弗をはじめとする声聞(しやうもん)たち、およびこの法会(ほうえ)に参集した天人・竜神・鬼神・人間・人間以外のさまざまな生ある者たちは、／『一切の大会(だいい)皆大(おおい)に歡喜し、佛語を受持して禮(らい)を作(な)して去りにき』**体全体に大歡喜を覚え、仏さまの言葉の一言一言をしっかりと胸に刻み込むように受持し、世尊を伏し拝んで礼拝し、その場を去って行ったのであります**」



「^{かん}勸^{ほつ}発」とは

(P401・1行／P299・1行)

『勸発』とは、『**元気づけ、励ます**』という意味です。すなわち、これまでの二十七品にわたって法華經の説法を聴聞(ちやうもん)し、その**教えを受持・実践しようという決意を固めた大衆を、普賢菩薩が元気づけ、励ます、力強い言葉に満ちた品**であります。誠に法華經の結びにふさわしい章と言わなければなりません。

ふげん ぼさつ ぎょう 普賢菩薩の四つの行

(P402・8行／P300・4行)

《普賢菩薩勸発品》と次の《仏説観普賢菩薩行法經》をよく読んでみるとわかるように、普賢菩薩はつぎの四つのはたらきを兼ねそなえた菩薩であります。

- ①みずから法華經の教えを実践する。
- ②法華經の教えをあらゆる迫害から守護する。
- ③法華經を実践する者が自ら招く「功德」と、それを迫害する者が自ら招く「罰」とを証明する。
- ④法華經の教えに背(そむ)いた者も、「懺悔」することで「罪から解放」されることを証明する。

ほけきょう じょうじゅ じょうけん 法華經を成就する四つの条件

(P412・8行／P308・2行)

『法華經を得(う)』というのは、単に法華經に会うということではなく、法華經に会った人が、それ(法華經)を本当に自分のものにすることです。そうしてこそ眞の功德を得ることもできるのです。そのためには四つの条件が必要であると教えられています。

①《信仰の確立》「諸仏に護念(ごねん)せらるることを為(な)え」。

自分は諸仏に護(まも)られているという絶対の信念を持つこと。

②《善行を積む》「諸(もろもろ)の徳本を植え」。

「善(よ)い心」を育てるとは一体何でしょうか。なかでも「善い行いをする事」が第一です。～「善い行いをする事」が、とりもなおさず、その人の心に「徳の根」を育てることになり、法華經の教えがその人の身に生きて来るわけです。

③《正しい目的の集団に入る》「正定聚(しょうじょうじゅ)に入(い)り」。

正しいことに決定(けつじょう)した者の集まりに入る。～信仰の力が二倍にも三倍にもなる。

④《みんなと共に救われるという精神》「一切衆生を救(おこ)すの心を発(おこ)せるなり」。

自分だけが悟り、救われるというのでは、本当の成道(じょうどう)ではないのであって、他ともに救われることで、この世に理想国土を建設するというのが大乘思想の根本です。～とくに法華經では、積極的に〈社会全体を救う〉ことをめざすよう、強調しています。

しほうじょうじゅ 四法成就

(P419・終4行／P313・1行)

以上の四つをきわめてやさしい言葉にまとめてみますと、次のようになります。

- ①自分は仏さまに生かされ、守られているのだということを、確信すること。
- ②いつも善(よ)い行いをするように心がけること。
- ③いつも正しい信仰者の仲間に入っていること。
- ④いつも社会全体を良くすることを目指すこと。

お釈迦さまのみ心を拝察するならば、～「これだけのことを心がければいいのだ」と、平易にまとめて下さったと思われます。法華經の教えの深遠(しんえん)さに、少したじろぎ気味だった人たちも、これを伺って、何か新しい勇気の湧き起る思いをしたことでありましょう。

《^{しゆい}思惟のひととき ①》

仏の滅後、如何（いか）にして法華經を得ること（身に具える）ができるのか？の問いに、釈尊は『四法成就（しほうじょうじゆ）』という四つの条件を説かれ、その第一条件として、「諸仏に護念（ごねん）せらるることを為（え）」を示し、『自分は仏さまに生かされ、守られているのだということを確認することだ』とされました。——では私は、『自分は仏さまに生かされ、守られていることを確認』しているか。振り返ってみましょう。

《^{しゆい}思惟のひととき ②》

では、『四法成就』の第二の条件である「諸（もろもろ）の徳本を植え」。つまり、『いつも善（よ）い行いをするように心がけること』という教えを、私は日ごろ心がけているでしょうか？

ただ ^{もくてき}正しい ^{しゅうだん}目的の集団にはいる

（P417・1行／P311・3行）

仏法では、人間の集団を次の三つに分けています。

《**正定聚**・^{しやうじやうじゆ}しやうじやうじゆ》 正しい教えを信する人々の団体をはじめ、親切運動、社会奉仕の団体などが、それにあたります。

《**邪定聚**・^{じゃじやうじゆ}じゃじやうじゆ》 悪いことに決定（けつじよう）した者の集まり。

《**不定聚**・^{ふじやうじゆ}ふじやうじゆ》 善にも悪にも定まっていない人たち。凡夫の大抵はこれであって、善にも赴（おもむ）くけれども、悪へ走ることもありうるという、グラグラしたものです。

我々信仰者は～ お互い教えあったり、励ましあったり、退転（たいてん）を引き止め合うことができます。～ お互いの心がしっかりと結び合って、信仰の力が二倍にも三倍にもなるものです。

《^{しゆい}思惟のひととき ③》

『四法成就』の第三の条件である「**正定聚**（^{しやうじやうじゆ}しやうじやうじゆ）に入（い）り」。すなわち『いつも正しい信仰者の仲間に入っていること』という教えを、あなたはどのように受け止めていますか？

『正定聚』に入（い）ることがなぜ必要なののでしょうか？ また、その『正定聚』に人々の手をとり、導き入れようとしているのでしょうか？ 振り返ってみましょう。

《^{しゆい}思惟のひととき ④》

『四法成就』の第四の条件である「**一切衆生を救うの心を発（おこ）せるなり**」の教えは、『いつも社会全体を良くすることを目指すこと』であると庭野開祖は説きます。

——では、この『いつも社会全体を良くすることを目指すこと』とは、具体的にどのようなことを意味するのか？ 今の私にとって、何をすることなのか？ 考えてみましょう。

濁(にこ)り切った悪い世。その濁りの原因やありさまを分析して、五つに分けています。

『五濁(ごじよく)の悪世』

- ①【劫濁(じよく)】—— 同じような時代が長く続いたために、自然と濁りが生じ、悪い症状が起こったもの。マンネリ。形骸化(けいがいか)している状態。
- ②【煩惱濁(ぼんのじよく)】—— 人々の煩惱がますます盛んになるために起こった濁り。時代の発展と共に、価値観が多様化して世の中が複雑化するために起こる障り。(煩惱・我儘がますますさか
んになるために起こる濁り。)昔、生活も社会のしくみも単純化していた。
- ③【衆生濁(しゅじよく)】—— 社会の構造が複雑になるにつれて起こるもの。みんながそれぞれの立場からものを考え、主張することによって生じる弊害。また、法律にさえ触れなければ、何をやってもかまわないという考えを主張する世の中。(「譲る精神が少なくなり、全体の調和を害する「我」立場を一方的に通す。)
- ④【見濁(けんじよく)】—— ものの見方が邪(よこしま)になっているために起こる世の濁り。正邪の別があいまいになった世の中。たとえば本能のままに(好きなように)生きるのが「人間らしい生き方」だという考え方がまかり通る世の中。(邪見(じゃけん)・狭い自己本位の見方が横行して正見を蔽(お
お)ってしまう)
- ⑤【命濁(めいじよく)】—— 人間の命が短くなるために起こる世の濁り。目前の利益や、すぐに効果のあがることばかりを追い求め、人の心がせせせした小さな人間となってしまう。「永遠の生命」を見つめることがなく、社会に醜(みにく)いゴタゴタが絶えず起こる世の中。

せそん のち ごひゃくさいじよくあくせ なか おい そ こ きょうてん じゅじ もの われまさ
『世尊、後の五百歳濁悪世の中に於て、其れ是の經典を受持することあらん者は、～我當

しゅご
に守護して』 (三八三頁 四行)

も ほけきょう おい いっく いちげ もうしつ ところあ われまさ これ おし とも どのじゅ かん
『若し法華經に於て一句・一偈をも忘失する所有らば、我當に之を教えて與共に讀誦し、還つ

つうり
て通利せしむべし』 (三八四頁 二行)

もし、法華經の一句または一偈(いちげ)を忘れてしまったならば、私はそれを教えてあげ、一緒に読誦して、その真意に通達(つうだつ)するようにしてあげましょう。

⇒ 一偈一句を忘れてしまったら、それを教えてあげる・・・というのは、むしろそのままの意味ではなく、「いくら考えても教えの真意がつかめない時は、まず実践ということに思いをめぐらしてみれば、必ずその真意に到達することができる」という意味です。

《愚惟(しゆい)のひととき ⑤》

庭野開祖は「『実践する』ことで『教えの真意』を掴(つか)むことができる」と説いていますが、あなたはどのように受け止めますか？ かみ締めてみましょう。

『三七日を満じ已らんに、我當に六牙の白象に乗って～ 其の人の前に現じて』

三週間（二十一日間）の実践を終えれば、私は六牙（ろくげ）の白象に乗って～ 人々の前に姿を現わしましょう。（三八四頁 終四行）

精神の習慣をつくる

（P438・4行／P327・4行）

（休みの日に一日だけでもよい、世事（せじ・世の中の出来事）を忘れて写経し、読経し、教えを学び、教えを思索し、同信の仲間と法について語りあうことが）なぜ必要かと言えば、行為に「習慣」というものがあるように、精神にも「習慣」というものがあるからです。我々が或あることを深く考え、切実に思い、それを繰り返すならば、いつしか「心の習慣」になってしまいます。～ ある期間、ほかのことはうち忘れて一心にひとつのことを思いつづけると、それが精神的習慣となります。～ もし三七日（さんしちにち 二十一日間）一心に精進するならば、その期間に培（つち）かわれた精神的習慣は、少なくとも半年ぐらいは持続するでしょう。そしてそれを数回繰り返せば、おそらく一生のものになるでしょう。～ 〈行〉の意義は、そこにあるのです。

《愚惟のひととき ⑥》

「ある期間、一心に〈行〉につとめ、そのことを繰り返すならば、それが〈心の習慣〉となり、一生のものとなる」と庭野開祖は説きます。これは、「善い行ない」をある期間、繰り返すならば、それが「一生のもの・精神の習慣」となり、反対に「悪い行ない」をある期間、繰り返していくと、それが「一生のもの・精神の習慣」となるという意味になります。
— この教えをあなたはどのように受け止めますか？ かみ締めてみましょう。

※ 《出来事・人に出会う》⇒ 《そのことを受け止めると、何かを感じる》⇒ 《感じたとおりに行動する》
⇒ 《パターン化・習慣化する》⇒ 《意・心・精神が培われる》⇒ 《人格が形成されていく》
⇒ 《人生が築き上げられる》

『此の經を誦誦せば、我爾の時に六牙の白象王に乗って～亦法華經を供養せんが爲の故なり』（三八三頁 終三行）

徹底した実践

（P428・終3行／P319・終2行）

象は〈実践〉の象徴です。しっかりと踏（ふ）みつけて歩いて行く象は〈徹底（底まで徹する）〉した実践の象徴とも言われているのです。～

ややもすれば、「自分は法華經行者であるから、必ず加護がある」と独善的に考えている人がありますが、それは思い上がりというものであって、いくら形の上で法華經行者であろうと、ほんとうに教えを実践しない者に加護も功德もあるものではありません。この一句は、そのような個人主義的増上慢（そうじょうまん）に対する戒めだと思います。

《思惟のひととき ⑦》

「いくら形の上で法華經行者であろうと、ほんとうに教えを実践しない者に加護も功德もあるものではありません」と庭野開祖は説きます。—— この説示をかみ締めてみましょう。

『若し法華經の閻浮提に行ぜんを受持することあらん者は、此の念を作すべし。皆是れ普賢威神の力なりと』(三八五頁 終三行) 世界中に広めるための法華經を受持する者は、自分に普賢菩薩の偉大なる神力が及んでいるのだということを、しっかりと自覚しなければなりません。

『①當に知るべし、是の人は普賢の行を行ずるなり。②無量無邊の諸佛の所に於て、深く善根を種えたるなり。③諸の如來の手をもって、其の頭を摩でたもうを爲ん』

(三八五頁 終行)

①「是の人は普賢の行を行ずる」

—— 法華經の教えを実践する人は、その人自身が『普賢菩薩』。

②「無量無邊の諸佛の所に於て、深く善根を種えたる」

—— 法華經を受持することができた人は、『過去世、仏のもとで精進した人』

※『已(すで)に曾(かつ)て十萬億の佛を供養し、諸佛の所(みもと)に於て大願を成就して』

(『法師品』二〇三頁 一行)

③「如來の手をもって、其の頭を摩でたもうを爲ん」

—— 法華經の教えを実践する人は、『(如來の子として) 仏から信賴されている人』

『是の人～ 卽ち兜率天上の彌勒菩薩の所に往かん』

(三八六頁 七行)

(法華經の教えを実践する) この人は～ 兜率天上(とそつてんじょう)にいる彌勒菩薩のそば近くに生まれ変わることができましょう。(P458・2行/P342・8行)

彌勒菩薩の所へ行くということは、彌勒菩薩のような『慈悲の心』を具えて、日々『菩薩行に励む身』となるという意味です。～ ある意味では、『最高の菩薩』ということができます。～ この娑婆世界に於いて『慈悲の行い』を続け、そのことに『最高の生きがい』と『喜び』をおぼえる人間になるということを象徴しているわけであります。

ちしゃ じょうけん 智者の条件

(P461・5行/P345・4行)

本当の意味で賢明(けんめい)な人。人生の意義を本当に理解し、真理にそった生き方をする人。
智者たるの条件は、およそ次の通りであります。

- ①物事の是非(ぜい)善悪(ぜんあく)をよくわきまえている人。
- ②自分のすること(言動)が、どんな結果を生み、他にどんな影響を及ぼすかを、予(あらかじ)め
見きわめることのできる人。
- ③自分がこの世の中でどんな位置を占めているか、どんな役目を持っているのか、それがよくわ
かっている人。
- ④人を愛し、人と調和することの高貴な喜びを知っている人。
- ⑤どのような生き方が人間らしい、意義ある生き方であるかがよくわかり、世の中全体をも良くす
る道を知り、あるいは考えだすことのできる人。

※ 以上の5条件を具える『智者』とは・・・。

①《善悪を分別して》⇒ ②《自分の行動がどんな影響を及ぼすかを知り》⇒ ③《自分の
置かれた立場を知り》⇒ ④《人を愛し、人との調和を求め》⇒ ⑤《世の中(周囲)を良くしよ
うと考えている》を具える人。

《愚惟(ぐい)のひととき ⑧》

「智慧を持つ者『智者』の条件」である①～⑤を踏まえて、自分はどうか、振り返っ
てみましょう。

も こ ほけきょう じゅじ どくじゅ しょうおくねん しゅしゅう しょうしゃ もの まさ
『若し是の法華經を受持し、讀誦し、正憶念し、修習し、書写することあらん者は、當

し こ ひと すなわ しゃか む にぶつ ぶつ く こ きょうてん き ごと
に知るべし、是の人は則ち釋迦牟尼佛を見るなり、佛口より此の經典を聞くが如し』

(三八七頁 六行)

もしこの法華經を受持・読誦し、教えの内容を深く理解して、それを正しく記憶し、さらには
繰り返し修行精進し、教えを書き写し、人に弘める者は、まさにその人は釈迦牟尼仏を見る
人であります。そればかりか釈迦牟尼仏の口から直接、説法を聞く人と同様であると言えます

(法華經)を信じ、一心に学ぶ者は、お釈迦さまの滅後においても「(お釈迦さまに)直接お目にかか
るのと同然だ」というのです。～ まことに大事な一句であります。 (P466・3行/P349・5行)

だいじょうてきすく きよくち
大乘的救いの極致

(P474・1行／P355・終2行)

『是の人は①心意質直にして、②正憶念あり、③福德力あらん』 (三〇八頁 二行)

◎「大乘的な救いに導く」三要素―

①『心意質直(しんにしちじき)にして』― 心に飾りけがなく真っ直ぐ。すなわち真理(妙法)に対して素直であるということ。

⇒ 自然と考えることが無意識のうちに真理と合致する。

②『正憶念(しょうおくねん)あり』― ものの考え方が正しく、常に真理に一致する。

⇒ 意識して考えることが全て真理に合致する。

③『福德力(ふくとくりき)あらん』― 自分が救われるだけでなく、他を救う力を備える。

⇒ 大乘的な救いの実践者となる。

しょうよくち そく
少欲知足

(P479・4行／P360・3行)

『少欲』― 世間的な欲が少ない。金銭的・物質的な欲ばかりでなく、地位・名誉・権勢・人の愛情や奉仕を求める欲が少ない。 ～ だからといって真理(妙法)を求める心は盛んでなければならない。～ 真理に対してまで無欲なのは、人生の怠け者であり、はなはだ価値の低い人間。

『知足』― 足ることを知ること。 自分の境遇に満足していることです。～ だからといって向上心がないというわけではありません。悠々(ゆうゆう)としているわけです。現在の仕事(置かれている立場)では、ベストを尽くし、伸ばすことには懸命です。

しぜん きょうきゅう
自然の供給

(P483・6行／P363・6行)

『是の人復衣服・臥具・飲食・資生の物に貪著せじ。所願虚しからじ。亦現世に於

て其の福報を得ん』 (三〇八頁 終四行)

「普賢よ。仏の滅後において法華經を受持・読誦する者は、衣食住にとらわれて貪欲・執着の日を送ることはありません。その人の願うことは、『事物による願望成就』ではなく『心の解脱』であり、その願いは必ず叶えられるであります」

本当に仏法に徹した人は、そういう物(資生・しせいの物)に貪欲と執着を持たないのです。なぜならば、そのような人には、必要なものは必ず自然と供給されるからです。～巡り巡ってやってくるのです。まったく不思議なことですが、事実です。

※ 「道心(どうしん)の中に衣食(えじき)あり、衣食の中に道心なし」 (伝教大師 最澄)

ほっしゅ た つみ 法種を断つ罪

(P485・1行/P364・終5行)

正しい教えの広まるのを妨害するような言動は、法律的には罪にはなりませんけれども、その影響はじつに甚大なるものがあります。もしその教えが調順に広まって行けば、どれくらい多くの人が幸福を得るかわかりません。また、どれだけ多くの人が悪の道から更生するかわかりません。そういう末広がりにどこまでも広がって行くはずの教えの流れを、ハタと断ち切ってしまうことを、〈法種を断つ／ほっしゅをたつ〉と言いますが、その罪の深さは計り知れないものがあるのです。

《^{しやい}患惟のひととき ⑨》

人の精進を止めることは《法種(ほっしゅ)を断つ》ことで、その罪の深さは計り知れないと庭野開祖は指摘します。— 自分の不注意な発言、行動で、他者の精進を止めたり、滞(とど)おらせたことはないか。振り返ってみましょう。

ほけきようさいご く 法華経最後の句

(P493・3行/P371・6行)

『^{いっさい}一切の^{だいえみなおい}大會^{かんぎ}皆大に^{ぶつご}歡喜^{じゅじ}し、^{らい}佛語^なを受持して^き禮を作して去りにき』(三八九頁 終二行)

誠に感動に溢(あふ)れた、幕切れの場面です。王舎城(おうしゃじょう)の町の向こうに連なる山々の上には、星の光がキラキラと見えはじめていたことでしょう。～ それを眺(なが)めながら下山する大衆は、本仏さまの懷(ふとこ)ろにしっかりと抱(いだ)かれている思いを、一步一步にかみしめていたことでありましょう。

《^{しやい}患惟のふいかえり まとめ》

今日の『普賢菩薩勸発品第二十八』の学びを通して、何を学び取ったか？
(または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか?) 振り返ってみましょう。

合 掌